

夫法華經第一方便品に云はく「諸仏の智慧は甚深無量なり」云云。釈に云はく「境淵無辺なる故に甚深と云ひ、智水測り難き故に無量と云ふ」と。抑此の經釈の心は仏になる道は豈境智の二法にあらずや。されば境と云ふは万法の体を云ひ、智と云ふは自体顕照の姿を云ふなり。而るに境の淵ほとりなくふかき時は、智慧の水ながるゝ事つゝがなし。此の境智合しぬれば即身成仏するなり。法華以前の經は、境智各別にして、而も権教方便なるが故に成仏せず。今法華經にして境智一如なる間、開示悟入の四仏知見をさとりて成仏するなり。此の内証に声聞・辟支仏更に及ばざるところを、次下に「一切声聞辟支佛所不能知」と説かるゝなり。此の境智の二法は何物ぞ。但南無妙法蓮華經の五字なり。此の五字を地涌の大地を召し出だして結要付嘱せしめ給ふ。是を本化付嘱の法門とは云ふなり。

然るに上行菩薩等末法の始めの五百年に出生して、此の境智の二法たる五字を弘めさせ給ふべしと見えたり。經文赫々たり、明々たり。誰か是を論ぜん。日蓮は其の人にも非ず、又御使ひにもあらざれども、先づ序文にあらあら弘め候なり。既に上行菩薩、釈迦如来より妙法の智水を受けて、末代悪世の枯槁の衆生に流れかよはし給ふ。是れ智慧の義なり。釈尊より上行菩薩へ譲り与へ給ふ。然るに日蓮又日本国にして此の法門を弘む。又是には総別の二義あり。総別の二義少しも相そむけば成仏思ひもよらず。輪廻生死のもとゐたらん。例せば大通仏の第十六の釈迦如来に下種せし今日の声聞は、全く弥陀・薬師に遇ひて成仏せず。譬へば大海の水を家内へくみ来たらんには、家内の者皆縁をふるべきなり。然れども汲み来たるところの大海の一滴を闇きて、又他方の大海の水を求めん事は大僻案なり、大愚癡なり。法華經の大海の智慧の水を受けたる根源の師を忘れて、余へ心をうつさば必ず輪廻生死のわざはひなるべし。但し師なりとも誤りある者をば捨つべし。又捨てざる義も有るべし。世間仏法の道理によるべきなり。末世の僧等は仏法の道理をばしらずして、我慢に著して、師をいやしみ、檀那をへつらふなり。但正直にして少欲知足たらん僧こそ、眞実の僧なるべけれ。文句の一に云はく「既に未だ眞を發さゞれば第一義天に慙ぢ諸の聖人に愧づ。即ち是有羞の僧なり。観慧若し發するは即ち眞実の僧なり」云云。涅槃經に云はく「若し善比丘あつて法を壞る者を見て、置いて呵責し駟遣し挙処せずんば、当に知るべし、是の人は仏法の中の怨

なり。若し能く駈遣し呵責し拳処せば、是我が弟子、真の声聞なり」云云。此の文の中にけんねほうしゃ見壞法者の見と、ちふかしやく置不呵責の置とを、よ能く能く心腑に染むべきなり。法華經の敵を見ながら置いてせめずんば、師檀ともに無間地獄は疑ひなかるべし。南岳大師の云はく「諸の悪人ととも俱に地獄に墮ちん」云云。ほうぼう謗法を責めずして成仏を願はゞ、火の中に水を求め、水の中に火を尋ぬるが如くなるべし。はかなしはかなし。いか何に法華經を信じ給ふとも、謗法あらば必ず地獄に墮をつべし。うるし千ばいに漆蟹の足一つ入れたらんが如し。どっけじんじゅう「毒氣深入・失本心故」とは是なり。經に云はく「在々諸仏の土に常に師と俱に生ぜん」と。又云はく「若し法師にしんごん親近せば速やかに菩薩の道を得、是の師に随順して学せば恒沙の仏を見たてまつることを得ん」と。釈に云はく「もと本此の仏に従ひて初めて道心を発し、亦此の仏に従ひて不退の地に住す」と。又云はく「初め此の仏菩薩に従ひてけちえん結縁し、また還此の仏菩薩に於て成就す」云云。返す返すも本ほんじゅう従たがへずして成仏せしめ給ふべし。釈尊は一切衆生の本従の師にて、而も主親の徳を備へ給ふ。此の法門を日蓮申す故に、忠言耳に逆らふ道理なるが故に、さか流罪せられ命にも及びしなり。然れどもいまだこりず候。法華經は種たねの如く、仏はうへての如く、衆生は田の如くなり。若し此等の義をたがへさせ給はゞ日蓮も後生は助け申すまじく候。恐々謹言。

建治二年丙八月二日

日蓮花押

曾谷殿